



TIEPh

Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy
Τρανσδισциплинарν Ινιτιατιβε φορ Εκο-φιλισοφν



Newsletter No. 12 2011. 7

東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ（Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy, Toyo University: TIEPh）は「平成 23 年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成 23 年度～平成 27 年度）」に採択されました。TIEPh は「自然観探究ユニット」、「価値観・行動ユニット」、「環境デザインユニット」の 3 ユニットから構成され、環境問題やサステナビリティに関する先進的な「エコ・フィロソフィ」の樹立を目指して研究活動を行っています。

伝えなければならぬこと

TIEPh センター長：山田 利明

3 月 11 日午後、私はちょうど 5 階の研究室にいた。初めガタガタと本棚のきしむ音がして、かなり波長の長い揺れが感じられた。その揺れはだんだん激しくなっていったが、横揺れであったから震源は遠いと考えた。しかし揺れはいっこうに収まらない。むしろ徐々に強くなりつつある。その時はすでにドアを開けて廊下に出ていたが、建物全体が騒音を発して「ゴー」というような地なりにも聞こえる。もしかすると関東大震災か…、と思う。その瞬間、かなり激しい揺れに襲われ、とうとう来たかと覚悟した。



小学校に入学する頃であったと思う。たまたま祖母の家において強い地震にあった。被害が出るほどのものではなかったが、揺れた。その時祖母は火鉢にかけてあった鉄瓶をとると、濡れた雑巾を炭火の上にかぶせて、その上から鉄瓶の湯をかけ始めた。要するに火鉢の火を消したのである。地震の時は火の始末、濡れ雑巾で火を包むようにして水をかければ灰が飛び散らない、ということもその時覚えた。1955 年頃の東京の下町でも、日常的に火鉢や七輪が使われていたのである。

祖母や両親の世代は、関東大震災を経験していたから、特に火の始末についてはうるさかった。それは同じ区内に、火災を逃れてきた避難民 3 万 8 千人が焼死した本所被服廠跡があったことと関係があったのかもしれない。被服廠跡では、荷車に家財道具を満載した人々であふれたが、それに火が移って大惨事となった。こうした事実を知る人も少なくなった。

3 月 11 日、地震の後で都内の道路は自動車であふれ、大渋滞が深夜まで続いた。もし沿道に火災が起こったとしたら、もちろん消防車は通れず車に延焼して、各所の道路は火の帯となって拡大した可能性もある。これに徒歩帰宅者が巻き込まれる。被服廠の二の舞である。

かつての惨事は教訓でもある。伝えるべきことは伝えねばならぬ。

東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ（TIEPh）は、さまざまな研究活動、シンポジウム、研究会を企画・運営しています。今回のニュースレターでは、2011 年度の活動報告および活動予定を掲載しています。詳細につきましては、TIEPh ホームページ (<http://tieph.toyo.ac.jp/home.html>) をご参照ください。

TIEPh への期待

TIEPh 客員研究員：(三重大学准教授) 田中 綾乃

このたび TIEPh が文部科学省の私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に採択されたと伺い、かつて TIEPh で研究助手を務めさせて頂いた身として、TIEPh の研究の意義が認められたことを嬉しく思っています。それと同時に、3.11 を経た私たちにとって、自然観の変容や環境汚染問題において新たな課題が求められるようになり、その意味で、今後の「エコ・フィロソフィ」研究に大いなる期待を抱いています。

2011 年 3 月 11 日の東日本を襲った未曾有の大地震は、誰もが言葉を失いました。マグニチュード 9.0 の大地震と次々と街を飲み込んでいく大津波。“自然”の圧倒的なエネルギーと脅威を目の当たりにし、4 ヶ月経過した今でも、私たちは進むべき方向性を見失っています。そもそも私たちの拠るべき<大地> (ground) が揺れるという経験は、私たちが礎にしてきた<根拠> (ground) が揺れるということです。

かつてポルトガルを襲ったリスボン大地震 (1755 年) は、当時のヨーロッパの哲学・思想に大きな転換をもたらしました。例えば、カントはリスボン大地震の翌年の 1756 年に、いち早く地震論について短編三編を書き上げます。さらに、近代の金字塔と呼ばれる三批判書や啓蒙思想も、大震災を経た後に産み出された哲学であることがわかります。“自然 (nature)”とは、単に外的な自然だけでなく、人間の内的な自然本性も意味するように、“自然”について考えを巡らすことは、私たちの<ものの見方>や<世界観>をあらためて問い直すことになるのです。

もっとも、今回の震災が 250 年前の大地震よりもさらに複雑で困難であるのは、原発事故という人災をもたらしてしまった点です。私たちの知は、半減期が 2 万 4000 年という気の遠くなるような猛毒プルトニウムを作り出しましたが、現在の私たちの知では、それを制御することが不可能です。しかし、それに関わらず、私たちは原発を使用し、結果的に、地球上の空気と大地と水を何万年もかけて汚染し続けることになったのです。

この絶望的な事態に、私たちはどう向き合えばいいのでしょうか。また、世代間倫理から見れば、どう責任を取るべきなのでしょうか。テクノロジーの安全神話が崩れ、経済、産業、行政をはじめ、あらゆる人間活動が複合的に見直しを迫られる混迷な時代だからこそ、根源的で実践的な「エコ・フィロソフィ」が果たす役割は、ますます重要だと考えています。今後の TIEPh の活動と発展に注目しています。

東日本大震災後の電力の使用に関する社会的ジレンマとその解決方法

価値観・行動ユニット：菅 さやか

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災の影響により、福島第一原子力発電所が大きなダメージを受けた。この発電所からの電力供給を受けている地域は、電力不足による計画停電や節電を余儀なくされてきた。そして、日中の最高気温が 30°C を越えるようになり、私がこの原稿を書いている今まさに電力の使用に関する「社会的ジレンマ」が生じている。

社会的ジレンマとは「個人が利己的な利益追求を行うことにより、社会的なコストが発生し、結果的には、社会全体を悲劇的狀態に陥れるという事態」である。例えば、夏になり、気温が上昇したことにより、個々人は暑さに耐えかねてエアコンのスイッチを入れる。しかしながら、暑さをしのぐという個人の利益を多くの人が追求した結果、東京電力管内は電力供給不足になり、電力使用制限を余儀なくされる。それでもなお、電力の需要が供給を上回った場合には、計画停電が実施され、その対象地域の人々はエアコンどころか全ての電気が使用できなくなるという悲劇的事態に直面することになる。

では、社会がこのような悲劇的な事態に陥るのを防ぐためには、どのような方法が有効なのであるか。これまでの社会心理学の研究知見によると、「構造変革アプローチ」と「態度変容アプローチ」の 2 種類の解決方法が存在しているという。前者は、協力 (例：電力の使用を減らす) には報酬を与え、非協力 (例：電力の使用を減らさない、または、増やす) には罰則を与えるような社会システムを整える方法であり、後者は、個人の状況認知や価値観を変容させることで、協力行動を促進する方法である。

「電気事業法27条に基づく電力使用制限令」は、まさに構造変革アプローチであると言える。構造変革アプローチは、短期的に社会的ジレンマを解消する有効な方法であると考えられているが、非協力の者を監視するシステムを構築したり、それを維持したりするのにコストがかかる上に、監視がなくなると、非協力が増加してしまうという問題を抱えているために、長期的に考えると、有効な方法であるとは言えない。すなわち、長期的、継続的に、社会的ジレンマを解消するには、態度変容アプローチの方が有効であると考えられる。具体的には、①メンバー間のコミュニケーションを促進することで、全体に対する信頼感や連帯感を高める、②各自がどのようなジレンマ状態に置かれているかの知識を共有する、③実際に協力してくれる人の割合が高いことを知ってもらい協力することに対する安心感を与える、といった方法をとる必要がある。すなわち「節電」について周囲の人々とよく話し、さらには電力使用状況をこまめにチェックしたりすることで、自己の置かれた状況を把握し、協力行動をとっている人々の多さを認識すれば、自発的に協力行動をとれるようになる可能性がある。

東日本大震災と、それによる福島第一原子力発電所の被害があってはじめて、節電という環境配慮行動に真剣に取り組むようになった人は多いと思う。地震が起きたことで、節電という環境配慮行動を意識し、実際に行動をとれるようになったことは、皮肉な気もする。今後、地震発生前と同じだけの電力供給が行われるようになったとしても、私たちは、今の気持ちを忘れず、地球環境のために継続的に節電を行っていけるようにしなければならない。今回の地震が私たちにもたらした教訓を胸に、多くの日本人が、節電以外の環境配慮行動にも継続的に取り組めるようになることを願う。

TIEPh 事務局から

<TIEPh 活動報告 (2010 年度) >

4月～7月

「全学総合」講義として、「エコ・フィロソフィ入門」を開講

10月7日～8日

TIEPh 共催

精神病理・精神療学会 第33回大会

於：東洋大学 白山キャンパス

10月9日

TIEPh 共催 講演会

「環境と精神—身体状況の哲学」

於：東洋大学 白山キャンパス

10月23日

TIEPh 主催 公開セミナー

「環境人間学」

於：東洋大学 白山キャンパス 6号館 6204教室

11月6日

TIEPh 後援 シンポジウム

「宗教と環境—地球社会の共生を求めて」

於：東洋大学 白山キャンパス

11月13日

TIEPh 後援 講演会

「環境思想・教育研究会 第15回例会」

於：東京農工大学 府中キャンパス 第二講義棟

12月11日

TIEPh 共催 研究会

「第2回人間再生研究会」

於：東洋大学 白山キャンパス 6号館 6309教室

3月1日

『「エコ・フィロソフィ」研究』vol.5 刊行

◆ TIEPh 主催 シンポジウムのお知らせ (内容は変更になる可能性もございます)

「日本の自然観と環境倫理—風土のしらべから」

日時：2011年10月8日(土) 13:00～ 会場：東洋大学白山キャンパス 井上円了ホール

講師 亀山純生(東京農工大学教授) 仙道作三(作曲家・エッセイスト) 演奏：斉藤裕子 ほか

Toshiaki YAMADA	Professor, Environment Design Unit Project Representative	山田 利明 代表 (センター長) 環境デザインユニット
Takashi OHSHIMA	Professor, Values and Behavior Unit	大島 尚 価値観・行動ユニット
Hideo KAWAMOTO	Professor, Environment Design Unit	河本 英夫 環境デザインユニット
Makio TAKEMURA	Professor, Nature Unit	竹村 牧男 自然観探究ユニット
Kohei YOSHIDA	Professor, Nature Unit	吉田 公平 自然観探究ユニット
Ichiro YAMAGUCHI	Professor, Nature Unit	山口 一郎 自然観探究ユニット
Shin NAGAI	Professor, Nature Unit	永井 晋 自然観探究ユニット
Tahoko SAKAI	Lecturer, Nature Unit	坂井 多穂子 自然観探究ユニット
Kiyoshi ANDO	Professor, Values and Behavior Unit	安藤 清志 価値観・行動ユニット
Hideya KITAMURA	Professor, Values and Behavior Unit	北村 英哉 価値観・行動ユニット
Kazuya HORIKE	Professor, Values and Behavior Unit	堀毛 一也 価値観・行動ユニット
Naoya SEKIYA	Associate Professor, Values and Behavior Unit	関谷 直也 価値観・行動ユニット
Sayaka SUGA	Assistant Professor, Values and Behavior Unit	菅 さやか 価値観・行動ユニット
Satoshi INAGAKI	Assistant Professor, Environment Design Unit	稲垣 諭 環境デザインユニット
Yoshiaki IMAI	Research Fellow	今井 芳昭 客員研究員
Ayano TANAKA	Research Fellow	田中 綾乃 客員研究員
Rina YOKOUCHI	Research Fellow	横打 理奈 客員研究員
Ryo NISHIMURA	Research Fellow	西村 玲 客員研究員
Yoko YAMAMURA	Research Associate	関 (山村) 陽子 研究助手
Shinji MUTO	Project Research Assistant (PRA)	武藤 伸司 プロジェクトリサーチ アシスタント

<TIEPh 今後の活動予定>

・TIEPh 主催 国際シンポジウム

「日本の自然観と環境倫理—風土のしらべから」

日時：10月8日(土) 13:00~17:00

会場：東洋大学白山キャンパス 井上円了ホール

・TIEPh 後援 シンポジウム

第2回「宗教と環境—新しい文明原理の生活化と宗教」

日時：11月12日(土) 13:00~16:50

会場：東洋大学 白山キャンパス 1号館 1102教室

・TIEPh 主催セミナー

「生物多様性という課題」(仮) 日時未定 (10月~11月内を予定)

ニュースレター第12号 平成23年7月発行

編集 東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ (TIEPh)

住所：東京都文京区白山5丁目28-20 6号館4F 60458室 Tel & Fax : 03-3945-7534

E-mail : ml.tieph-office@toyo.jp Homepage : http://tieph.toyo.ac.jp/